

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520044

研究課題名(和文)心・身体・環境をめぐる「仁」概念の再検討 - 『朱子語類』巻4～6を中心に

研究課題名(英文) Reconsidering Humanity (ren, jin) over minds, bodies, and environments - with a focus on Zhuziyulei (Shushigorui) Vol.IV-VI

研究代表者

恩田 裕正 (ONDA, HIROMASA)

東海大学・清水教養教育センター・教授

研究者番号：70307297

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：日本を含む東アジア思想史において重要な位置を占める朱子学の基本文献である『朱子語類』、中でもその基本概念に関する問題を扱っている巻4～6「性理」篇を対象に、心・身体・環境をめぐる側面や同時代の道教の身体技法との関わりを通して「仁」概念の再検討を行った。研究成果は、主に『朱子語類』巻4の訳注としてまとめており、平易な現代日本語による訳文とその詳細な注の形で発表されることになるため、専門外の一般読書人にも利用しやすいものとなっている。

研究成果の概要(英文)：The study of neo-Confucian thought (School of Zhu Xi [Shushigaku]) is indispensable to understand East Asian societies, including Japan. In the thought, Humanity (ren, jin) is the core concept, and therefore we reconsidered it. In particular, we focused on Zhuziyulei (Shushigorui) Vol.IV-VI as a main subject of our research, because Zhuziyulei is one of the important texts of neo-Confucian thought. More specifically, we studied a relation between Humanity (ren, jin) and minds, bodies, and environments, as well as between Humanity (ren, jin) and body technique of Taoism contemporary with Zhu Xi (Shu Ki). To clearly show the results of our study, we inserted detailed endnotes for Zhuziyulei Vol.IV and translated it into easily accessible Japanese. As a result, it now provides easy access to the general public.

研究分野：中国哲学

キーワード：中国哲学 朱子学 朱子語類 心身 仁

## 1. 研究開始当初の背景

南宋の朱熹(朱子)によって集大成された朱子学は、近世以降の日本を含む東アジア思想史においてきわめて重要な位置を占めている。この朱子学を理解するためには、その重要概念である「仁」の検討が欠かせない。もちろん、従来の研究の蓄積にも厚いものがあるが、以下に述べるようにまだ十分に検討されていない問題が残されている。

朱熹は、この世界には一定の恒常性・法則性があるとし、これを「理」として抽出した。この「理」は、人においては、その本質である「性」として「心」に存在し、その内実は「仁・義・礼・智」という儒教の基本的な道徳性(五常)、さらに端的に言えばこの四者を包括するメタレベルの「仁」(專言の仁)と考えられた。しかし、宋代に入り、程頤(『易伝』)によって、一方でこの「仁」は、『易』乾の「四徳」(元亨利貞)を媒介に、宇宙・自然のはたらき(人がそこに生きている環境)と結びつけられ、「生き生きとした(生生)」「(人の肉体を含む)物を生み出す(生物)」作用こそ「仁」の本質であると主張されるようになった。そして、朱熹もこの程頤の考えを受け継いでいる。そうであれば、朱子学の「仁」概念を探求するためには、(生身の肉体・身体を含む)自然・環境と心とがどのような関係にあるのかが明らかにされねばならないのだが、従来の研究では抽象的・一般的な言及に止まり、具体的な自然・環境や生身の肉体・身体と心とがどのように関わるのかについては、必ずしも明確にされていない。

また、朱子学に結実する同時代の儒教思想とも関係を持ちつつ、同時に特殊な身体技法を発達させてきた道教思想との比較もまだ十分なものではない。朱子学の先駆者たちや朱熹と同時代の北宋から南宋にかけて展開した道教の新しい潮流に、張伯端に始まる内丹道の一派があり、この一派は、南宋滅亡の前後から全真教と融合していく。この張伯端は『悟真篇』で、内丹(命功)とともに頓悟(性功)の必要性をあわせて説き、これはやがて「性命双修」として全真教における大きな命題とされるにいたる。張伯端以降、命功すなわち身体という一つの自然を場として内丹を錬成・修養するという従来の功法に加え、性功すなわち直接的には身体に与らぬ唯心的な頓悟をもあわせ修めることとなったわけであり、道士たちは身体・自然と心の関係を性命論という形でさまざまに議論することとなった。そこにはやはり儒教にあって「性」(朱子学においてはその中心が「仁」)を論じていた朱熹の先駆者たちと通底する時代思潮があったと考えられる。そうであれば、儒道二教において当時議論の焦点とされた「性・仁」説の問題、またそれが自然・環境の一つとしての身体における修養法とどのように関係しているのかを検討することは、非常に重要なことであろう。

さらに、対象となる朱子学の基本的な文献についても課題はある。朱子学の基本文献としては、『四書集注』、『朱文公文集』がまず挙げられるが、朱熹との問答をその門弟たちが記録したノートを後に編纂した『朱子語類』も重要な文献として欠くことはできない。そもそも主著である『四書集注』の簡潔な注の記述の意味を十分に理解するためには、『朱子語類』に残された関連の問答を参照しないわけにはいかない。しかし、『朱子語類』は全140巻にもなる浩瀚なものであり、そのことばはその文献成立過程の性質上、記録の確度に「ぶれ」が入り込むことが避けられないこと、当時の口語表現を多数含んでいること等、思想史的な検討・考察を要する点を抜きにしても読解は容易なものではなく、これまでに公表されている読解には多くの誤読や不十分な点が見られるのが現状である。

このように、まだ十分に解明されていない問題が残されていた開始当時の研究状況を背景にして、その問題解決の一端を探ることを目指し、本研究は計画、実施されたのである。

## 2. 研究の目的

南宋の朱熹(朱子)によって集大成された朱子学は、日本を含む東アジア思想史においてきわめて重要な位置を占めており、近世以降の東アジア社会を知るためにも、朱子学理解は欠かすことはできない。この朱子学を理解するためには、その中心的な概念である「仁」の検討が必要であり、もちろんこれまでも厚い研究の蓄積がある。

しかしながら、「仁」概念についてのこれまでの研究は、心・道徳性の問題に焦点をあてたものが中心であり、(生身の肉体・身体を含む)自然・環境と心との関わりについては、多少の関心は持たれたものの抽象的・一般的な言及に止まり、具体的な自然・環境や生身の肉体・身体と心とがどのように関わるのかということについては、必ずしも明確にされていない。また、生身の肉体・身体との関わりという点からは、朱熹と同時代の道教の身体技法との関連について検討が必要となるはずであるが、それについてもこれまで十分には検討されてこなかった。さらに、朱子学の「仁」概念を明らかにするには、朱熹との問答をその門弟たちが記録したノートを後に編纂した『朱子語類』という重要文献の読解が欠かせないのであるが、その成立過程の性質上同書に多数含まれる当時の口語表現に対する理解が十分でなかったこと等のために、これまで必ずしも正確に読まれてこなかったことがある。

本研究は、こうした研究状況をふまえ、これまでの朱子学における「仁」概念について、(1)その概念が意味する心と身体との関わりのある方を、(具体的でリアルな)自然・環境の中でもう一度捉え直すこと、(2)朱熹とほぼ同時代の、張伯端に始まる道教の内丹道に

おける思想や具体的な身体技法と比較しつつその特質をあぶり出すこと、(3)以上の点を、これまで朱子学の基本文献としては十分に正しく使われているとは決していえない『朱子語類』に対する精確な読解を軸に据えて明らかにすることを目的とするものである。

### 3. 研究の方法

本研究は、『朱子語類』全 140 巻のうち、朱子学の中心をなす心性論の基本概念に関する問答をまとめた巻 4～6「性理篇」を精読することを通して、朱子学の「仁」概念を再検討することを目的とするものであった。

この目的を達成するためには、『朱子語類』巻 4～6「性理篇」をわかりやすい現代日本語によって精確に読解することが基盤となる。その精確な読解にあたっては、まずは対象とする『朱子語類』巻 4～6「性理篇」の記述それ自体のことばの意味を精密に把握しなければならないが、これには「語類」という特殊なテキストの性格上大量に含まれる当時の口語語彙の分析が不可欠である。また、『朱子語類』巻 4～6「性理篇」の記述は、それとして独立して存在しているわけではなく、南宋という時代において他のさまざまな思想（潮流）との関わりの中で生きた朱熹の編み上げた思想体系に位置づけられるものである。その精確な読解には、『朱子語類』の他の巻、『四書集注』・『朱文公文集』等の朱熹自身によるテキスト、経書及びその注疏、道教文献等における記述とのネットワークを構築して明示することも必要となる。そして、このような方法をとることにより、「仁」をはじめとした朱子学の基本概念をこれまでのような漢語に寄りかかった平板なものではなく、「生きた」ことばに立脚した立体的なかたちで再提示できると考えた。

このため、本研究においては『朱子語類』の訳注、しかも諸テキストとの関係を示した上で、「仁」等の基本概念を解説する詳細な注を附すというかたちがどうしても求められる。そして、この作業は、朱熹（及びその弟子たち）のことばの精密な解釈を行うことと大量の関連文献を博捜し分析することが必要であり、具体的には次の役割分担で研究を遂行した。対象とする『朱子語類』のテキストの最初の読解については、各巻を分割して研究代表・分担者それぞれに割り当てた。その上で、恩田が本研究全体の統括の他、『朱子語類』の記述それ自体の精細な読解部分、特にそこに大量に含まれている口語語彙の分析を、伊東が朱熹の主著である『四書集注』との関係の分析を、林が朱熹の書簡や雑著等を集めた『朱文公文集』との関係の分析を、同じく松下が内丹道を中心とした道教文献との関係の分析をそれぞれ主として担当した。そして、これらの読解と分析を総合して訳注初稿を作成した。さらに、この訳注初稿に基づき、訳文のチェックはもちろんだが、

注の項目立て、注における概念の解説、注に引く文献の適否等、特に注について重点的に検討を加えて最終的な訳注稿を作成した。

つまり、本研究では、再検討された朱子学の「仁」(をはじめとする諸)概念について、『朱子語類』巻 4～6「性理篇」の平易な現代日本語による訳文と注、とりわけ注を通して明らかにするという方法を取ったのである。

### 4. 研究成果

本研究は、『朱子語類』全 140 巻のうち、朱子学の中心をなす心性論の基本概念に関する問答をまとめた巻 4～6「性理篇」を精読することを通して、朱子学の「仁」概念を再検討することを目的とするものであった。

近世以降の日本を含む東アジア思想史においてきわめて重要な位置を占めている朱子学の基本概念である「仁」については、これまでも多くの研究の蓄積があった。しかし、従来の研究では、その心・道德性に関する側面に焦点を当てたものが中心で、「仁」の持つもう一つの側面である宇宙・自然のはたらき(人がそこに生きている環境)と結びつけられた「生き生きとした」「物を生み出す」作用については、具体的には、必ずしも明らかにされているとはいえなかった。また、このような朱子学における心と身体の関係性の検討があまり行われてこなかったことにより、心と身体双方の修養を説き、特殊な身体技法を発達させてきた朱熹と同時代の道教思想との比較も十分になされていなかった。さらに、朱子学の基本文献である『朱子語類』が、当時の口語表現を多数含んでいることで、これまで必ずしも正確に読まれてこなかったということがあった。

本研究は、「仁」等の基本概念を取り扱う、朱熹と弟子たちとの問答を収めた『朱子語類』巻 4～6を精確に読み解くことを通して、こうした諸課題に対して、まとまった形で一つの解答を与えたものといえる。すなわち、『朱子語類』の本文を当時の口語表現の正確な理解によって読解し、その本文の意味を『四書集注』や『朱文公文集』等の朱熹自身によるテキスト、経書及びその注疏、道教文献等における記述とのネットワークを構築することで位置づけ、それらをまとめた訳注というスタイルで提示することで、『朱子語類』というテキストを直接読んでいくことによって、その本文の表層的な意味を理解することに止まらず、その読者にとって、朱子学の「仁」(をはじめとする諸)概念が立体的に浮かび上がるようにしたのである。

研究期間全体においては、『朱子語類』巻 4については詳細な注を付した訳注稿作成の作業をほぼ完了することができた。この作業の中で、朱子学の「仁」概念などの基本概念について、これまであまり重視されてこなかった心・身体・環境をめぐる側面から再検討を行い、その成果を翻訳と注釈というわか

りやすい形で示す準備が整ったといえる。

この『朱子語類』巻4の訳注稿自体については、2015年5月末の時点では未公表であるが、本研究で得られた成果は、学会発表と別の論著の形でその一端を公表している。まず『朱子語類』中に含まれる口語語彙の分析については、恩田が現在進めている巻8・94など他の巻の訳注作成に反映させ、その一部を論文として公刊している。次に、朱子学の基本概念については、その宋～清代における理解や批判のあり方等をめぐって、伊東・林が学会発表を行い、論文を公刊している。また、道教思想やその修養法との関わりについては、松下が学会発表と論文の公刊を行っている。

なお、巻4の訳注については、今後本研究の代表者・分担者による共著論文として順次発表する予定であり、その論文を元に再度の修訂を行い、『朱子語類』訳注刊行会の『朱子語類』全訳計画の一環として、汲古書院より学術書として刊行されることがすでに決まっている。

また、巻5～6についても共同研究を継続し、順次その訳注を論文として発表し、最終的に同様の形で汲古書院より単行本として刊行する予定である。

つまり、朱子学の「仁」(をはじめとする諸)概念の再検討、及び『朱子語類』の口語語彙に関する本研究の成果は、東アジア思想史において重要な位置を占める朱子学の基本文献でありながら、これまで必ずしも正確に読まれず、その重要性に比して十分に活用されているとは言い難かった『朱子語類』(の一部)を、平易な現代日本語に訳し、詳細な注を加えて出版する形で発表されることになるため、中国近世思想の研究者のみならず、日本思想史・近世史等の関連領域の研究者や、専門外の一般読書人にもきわめ利用しやすいものとするができることになる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計20件)

恩田裕正、『朱子語類』巻八「総論為学之方」篇訳注(五)80条～90条、中国哲学研究、査読有、第28号、2015、64-80

恩田裕正、『朱子語類』巻九十四訳注(十九)汲古、査読有、第67号、2015、印刷中

林文孝、陳普『字義』の資料的性格 儒教における哲学辞典的著作の一例として、言語 社会 文化(学習院大学外国語教育研究センター) 査読有、第13号、2015、19-40

林文孝、資料 陳普『武夷權歌註』訳注 川上りとしての朱子学、山口大学哲学研究、査読無、第22巻、2015、1-36、<http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/yunoc>

[a/handle/C070022000001](http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/yunoc)

伊東貴之、伝統中国をどう捉えるか? 研究史上のポレミックに見る儒教の影、現代思想、査読無、vol.42-4、2014、154-166

恩田裕正、『朱子語類』巻八「総論為学之方」篇訳注(四)44条～79条、中国哲学研究、査読有、第27号、2014、1-27

松下道信、『還丹秘訣養赤子神方』と『抱一函三秘訣』について、集刊東洋学、査読有、110、2014、21-40

恩田裕正、『朱子語類』巻九十四訳注(十六)汲古、査読有、第64号、2013、55-62

伊東貴之、中国近世思想脈絡中所見的欲望:調和与共生、中国哲学(中国社会科学出版社) 査読無、第26輯、2013、390-408

恩田裕正、『朱子語類』巻九十四訳注(十五)汲古、査読有、第63号、2013、33-39

伊東貴之、戦後日本の中国思想史研究の諸傾向についての一考察 主として、島田虔次と溝口雄三の両氏を例として、「中国的日本認識・日本的中国認識」学術討論会論文集(復旦大学文史研究院・復旦学報・国際日本文化研究センター)、査読無、2013、71-95

林文孝、瀬踏みのあとに 溝口雄三『中国思想のエッセンス 異と同のあいだ』からの展開と未展開、境界を越えて 比較文明学の現在、査読無、第13号、2013、9-26

[学会発表](計11件)

松下道信、浅談道教影響下吉田神道内丹学説的作用、多元信仰下的全真道研究国際学術研究会、2014年8月14日、山東省棲霞市(中華人民共和国)

林文孝、阮元「論語論仁論」の評価をめぐって、国際日本文化研究センター共同研究会「心身/身心」と「環境」の哲学 東アジアの伝統的概念の再検討とその普遍化の試み、平成26年度第2回研究会、2014年7月27日、国際日本文化研究センター・第1共同研究室(京都府京都市)

松下道信、円明老人『上乘修真三要』について、遼金西夏史研究会、2014年3月22日、東北大学川内キャンパス・文学部棟3階視聴覚室(宮城県仙台市)

林文孝、石堂先生陳普の字義の学、学習院大学外国語教育研究センター研究プロジェクト「中国思想における倫理と功利」研究会、2013年9月27日、学習院大学外国語教育研究センター(東京都豊島区)

伊東貴之、戦後日本の中国思想史研究の諸傾向についての一考察 主として、島田虔次と溝口雄三の両氏を例として、「中国的日本認識・日本的中国認識」学術討論会、2013年2月28日、上海市(中華人民共和国)

林文孝、溝口雄三『中国思想のエッセンス』を評す、国際日本文化研究センター共同研究会「心身/身心」と「環境」の哲学 東アジアの伝統的概念の再検討とその普

遍化の試み」平成 24 年度第 2 回研究会、  
2012 年 7 月 28 日、国際日本文化研究セ  
ンター・第 1 共同研究室（京都府京都市）

6．研究組織

(1)研究代表者

恩田 裕正 (ONDA HIROMASA)  
東海大学・清水教養教育センター・教授  
研究者番号：70307297

(2)研究分担者

伊東 貴之 (ITO TAKAYUKI)  
国際日本文化研究センター・研究部・教授  
研究者番号：20251499

林 文孝 (HAYASHI FUMITAKA)  
立教大学・文学部・教授  
研究者番号：60263745

松下 道信 (MATSUSHITA MICHINOBU)  
皇學館大学・文学部・准教授  
研究者番号：90454454